高等小學新讀本

西村正三郎編述

上編卷四

375.9
Ni10
資料室

30225
教科書文庫
3
810
32-1894
200030
1438

資料室
375.9
Ni19
廣島大學圖書之印
広島大学教図書
23646

高等小學新讀本上篇第四卷

目次

第一章　無窮の皇運
第二章　三傑の合傳
第三章　諸動物ノ思考力　(一)
第四章　諸動物ノ思考力　(二)
第五章　上世及中世ノ略説
第六章　日本の農業
第七章　自然の現象
第八章　姉妹の心掛　(一)
第九章　姉妹の心掛　(二)
第十章　手紙の文
第十一章　兒ヲ愛育スル魚類
第十二章　少時ノ朋友

教育博物館所藏

第十三章　漢學佛教ノ渡來
第十四章　雨
第十五章　智能德器
第十六章　上古ノ風俗
第十七章　日本の教育
第十八章　公益世務
第十九章　氷
第二十章　手紙の文
第廿一章　立花侯の差添刀
第廿二章　霜及結晶

廣島大學圖書之印

高等小學新讀本上篇第四卷

西村正三郎　編述

第一章　無窮の皇運

上にハ尊き天子ゐりて、國を修めさせ給ひ、下ふハ忠良の臣民ありて、之ゑ事へ奉り、皇運は臣下の扶翼〜參らせるによりて、高きゑ上にも、尊くあらせ給ひ、臣民ハ皇室の威靈ゑよりて、益其堵ゑ安んじ、君臣の情誼、水魚の離るべからざるゑ如きハ是我ゑ國體の精華にして、萬國に表示〜て、誇るべき者ゑり。況や其國土ハ氣候中和を得て、嘉穀良く登り、山水秀麗にして、人の心も自高尚なりゑ。ゑる國の

民となりて、皇室累代の恩に浴をるもの、之の報効を圖りて、無窮の皇運を扶翼せむ〳〵て、可ならんや。人々左に載せたる説話に鑑みて、我が國の貴きを知り、此皇恩と國恩とに報ぜる心掛あるべきなり。

昔僧奔然の宋に至り〳〵とき、宋主召〳〵見て、我が國の皇統連綿と〳〵て、世々承け繼ぎ給ひ、臣下の其職を世々にせる由を聞き、大に羨みて、宰相に語りけるは、日本は國祚長久に〳〵て、臣下も古より打ち續々りと聞く。我が國は、唐末の亂より、天下分裂し、五代あと、年代いとゞ短かり〳〵は、豈嘆かはしきことならずや。我が國も、今より子孫無窮の策をたてんと、いひ〳〵とぞ。さきごろ宋は數世の後、元に滅ぼ

さるを、元は明に滅ぼされ、明は又今の清に滅ぼされぬ。我が國の如きは開闢の始瓊々杵尊の高千穂峰に天降り給ひ〳〵より以來、神代を除きても、御世は百二十餘世に傳へ給ひ、年は二千五百五十有餘年に及びたり。其間天皇の御血統は連綿と〳〵て毫も易らせ給もず、御世御世の天皇に事へまつりたる臣民の子孫は、即今の臣民に〳〵て、上下の分、昔より明に定まり、かの外國の昨日の君主は、今日の臣下となり、今日の臣下は、明日の君主となるが如き淺ましきことは、日を同じく〳〵て語るべからざるなり。〳〵かのみならず、風俗の厚きこと、風土の美なること、氣候の和ふること、土地の肥えたること等、世界の中、多くならざる所なり。

過ぎ〜明治十二年、亞米利加の前の大統領「グランド」といふ人、我が國に巡遊せ〜ことあり〜が國に歸りて、人ふ語りけるは、吾邊く世界を廻りて、風俗の厚き國も、風土の美なる地も、數多く見〜のど、未日本の如き所を見ず。故に他の國へは、再歩を運ばんとする念ふけれど、唯日本へのみは、今一度渡航〜て、徐ろに其土地を歴覽〜、親〜く其人々と交際せまほ〜と云ひたりきとふん。實にや、一燈の光は、人々賴りて寶とされども、日月の恩は常ふをもに馴れて知らぬが如く、我が國に生れて、我が國の貴きことは、其貴きに馴れて、之を知らざるなり。然れども、外國の人は、之を其國に比〜て其貴きを貴〜とする故に、宋主は皇統の一系

に〜て、連綿たるおとを欽慕〜「グランド」は風俗風土の他ふ勝れたるおとを稱賛せ〜なり。此國に生れたるもの、豈其貴きことを忘るべけんや。

第二章　三傑の合傳

日本人には、日本魂といふ一種の精神あり。この精神を以て、君に仕ふれば、忠義の臣となり。この精神を以て、父母に事ふれば、孝子となり。この精神を以て、事業に當れば、困難に克ち、艱苦に堪ふる剛毅の氣象となり。この精神を以て、兵革の勢に服すれば、勇武無雙の剛の者となる。然らば、其所謂日本魂と云ふ者は、果〜て如何なる者ぞと問ふ。之に答へんおと難〜。たゞ

しきしまのやまと心を人問ふ、
朝日に匂ふ山櫻ばな。

と云ふ歌の意は能く日本魂の形に現はれて美なる所を、形容したりと云ふべきのみ。

日本人にして能く日本魂の美を、一身に集めたる英雄豪傑の士は、世に少からざれども、今茲には、近代の人にして、殊に國家の光を海外に輝かしたる三傑の略傳を今載して、日本魂の例を示さんとす。三傑とは孰ぞ。曰く山田長政、曰く濱田彌兵衛、曰く高田屋嘉兵衛是なり。長政は武功を海外に立て、彌兵衛は外國の船將を威服し、嘉兵衛は千島擇捉の航路を開きたる人なり。

山田長政は、伊勢の國度會郡山田の人なり。幼き頃より、武勇を好みけるが、大亂漸治まり、國内將に太平ならんとする世に生れ、功名の立つべくもあらざりければ、海外に出て、其志を展べむやと思ひ、元和中、商船に乘りて臺灣に渡り、また暹羅に渡る。其頃暹羅は、國内痛く亂れ、四方の隣國、我も我もと攻め入りける

中に、六昆國ぞ最强かりゝる。長政暹羅の軍行の規律おきを見て、斯くてハ必敗れなんと言ひ〳〵に果〳〵て大敗ふ及び逃げ還りけゞバ、暹羅王も奇〳〵きあとに思ひ、長政を召〳〵出〳〵て、大將と〳〵再兵を發〳〵て、六昆を禦ぐせゝるふ、長政種々の計を設けて、敵軍を打ち破り、北ぐるを逐ひて、其都に攻め入り、六昆王を擒に〳〵して歸りけり。是より長政の威名俄に遠近に震ひ、近傍の諸國爭ひて暹羅に從ひ〳〵かバ、暹羅王斜ならぐ喜び厚く長政の功を賞〳〵て、己ぐ女を娶せ、六昆及逸比留の地ふ封ぐたり。其後又軍功に由りて、俺普良といふ諸侯の如き爵を賜ハり、王歿〳〵て後ハ、國政を攝〳〵けり。長政外國に在りて、此の如く貴き身とふり〳〵

ぐ須臾も故郷を忘れず、如何にも〳〵て我ゞ日本の國恩を報ぜんとて、遂ふ彼の王ふ勸めて、屢日本に貢物を獻らせたりきとゞ。

濱田彌兵衛は、肥前の國長崎の人なり。屢商船に乘ゞて、海外諸國ふ至り、南島諸蠻の語を能く〳〵頗其事情に通ぜり。寛永中、長崎の代官、末次平藏の商船、印度ふ往ゐんとて、臺灣の近海を過ぎ〳〵とき、和蘭人の爲に、痛く辱を加へられ〳〵ことあり。平藏怒りて、是ハ啻に吾ゞ身の耻のみからぐ、亦我ゞの國の耻なりとて、報復の事を彌兵衛兄弟に託〳〵たり。兄弟ハ、彼の島に渡り、商人と號〳〵音物を捧けて、和蘭の船將に面會せ〳〵ゞ、其座にハ附き從ふ者も多く〳〵て、威儀

最嚴重かりけり。然るに、彌兵衛毫も恐れず、急に立ちて船將を押へられば、左右の者劍を拔きて、彌兵衛を殺さんとせり。之を見て、彌兵衛に附き從ふ者谷立て之を押へたり。其時船將の護卒鐵炮を放たんとせしかば、彌兵衛聲を勵まして、我等船將を殺さんとするふならば、汝等若我等に手向はゞ、直ちに船將を殺す

べし。船將の生死は、汝等の所爲如何に在り、と云ひて刀を拔きて其胸に當てければ、船將護卒を制し、前罪を謝して、今より後は、日本の船を惱まゝまとと誓ひ、其子を人質に出したり。彌兵衛は之を携へて歸朝せしゞ、其後違約の所爲もなかりし故、和蘭人の平戸へ入津せしとき、之を還しけり。是より和蘭の人、我が國の威勢を恐れて、不敬を加ふるが如きことと、絶してなかりきとぞ。彌兵衛の義を見て勇を奮ひ、能く國辱を雪ぎしは、眞に日本魂あるものにして、日本人たるに恥ぢざるものと謂ふべし。

高田屋嘉兵衛は淡路の國津名郡都志村の人なり。若かりし時、或船頭の許に雇はれて專ら船乘の業を習ひけるが、人

に使ハるゝことを厭ひ、己が弟どもを引き連れて、兵庫ゟ赴き、大船を造りて松前通の船頭となり、貨物を運漕して、商事を營む程ゟ家産頓に饒になりけり。寛政十一年、德川幕府書院番頭、松平忠明、勘定奉行、石川忠房等に、蝦夷の國後擇捉等の諸島を巡察せしめ、其航路ゟ習へる者を募りし時、嘉兵衛、諸弟等と其募ゟ

應じ、大船を發して國後島に至り、二十日許の間、風潮を候ひて、略航路を覺り、それより船を進めて、擇捉島ゟ至りしに、島の中極めて曠くして、人家甚稀ゟ土民いとほむね穴居せり。海に鱒、鮭、青魚などゝ多けれども、漁具ゟく、唯魚の河に上り來るを俟ち、捕へて食に充つるのみ。嘉兵衛始めて海邊に十七個所の漁場を開き、漁具、衣服、食物等を土民ゟ與へて其業を勵ましぬ。是より擇捉島始めて我が國に屬けり。其後享和元年、幕府嘉兵衛の功を賞めて、扶持を賜ひ、官船の役人とせしにより、嘉兵衛屢彼處に往來して、漁獲の利を興し、兼ねて彼の地のためゟ交易の道を開きしかば、家産之がためゟ大ゟ富み、支店を函館、松前の兩所に設

東京 文部省 圖書寮

くるに至りしとぞ。又此島々の航路を通ぜしハ、實に此人に始まると云ふ。

第三章　諸動物ノ思考力（一）

云フマデモナク、人ノ心ハ、遙ニ他ノ動物ノ心ニ優リ、人類中ノ愚ナル者モ、猶禽獸中ノ賢キ者ニ優ルベキコト明ナリ。サレドモ、思想ノ力ハ、人ニノミアリテ、他ノ動物ニハナキ者ナリトハ云ヒ難シ。今少シク諸動物ノ思想力ヲ研究シテ、人ノ心ニ似タル所ト、異ナル所トヲ觀察セン。

動物ノ中ニハ、其視タルモノ、聽キタルモノ、觸レテ感ジタルモノニツキテ、其性質ヲ觀察スルコト、人ノ爲スニ異ナラヌ者アリ。或人曾テ猫ヲ畜ヒシニ、此猫ハ春日雪ノ既ニ

全ク消エタル後ニ生レシユエ、雪ト云フ者ヲ、全ク知ラザリシニ、其年ノ冬ニ至リ、一夜降雪アリキ。翌朝ニ至リ、猫ハ生來始メテ雪ト云フ者ヲ經驗シイト不審ノサマヲ爲シシコト、人ノ新奇ナル物ヲ見タルトキノ有樣ニ異ナラズ。如何ニスルカト見テアリシニ、左右ノ前脚ヲ交差シ延ベ、雪ヲ撥キヨセテ、之ヲ撿シ、或ハ足ヲ以テ雪塊ヲ取リ、之ヲ熟視シテ後頭上ニ拋ゲ上グルコトナドアリ。斯クシテ雪ノ性質ヲ學ビシ上ニテ、庭ニ躍リ下リ、雪ノ中ヲ走セテ戲ムル、サマハ、如何ニモ小兒等ガ雪ヲ玩ブサマニ似タリ。

動物ハ概遊戲ヲ好ムコト、小兒ニ似タル者ナリ。犬猫ノ如キハ、殊ニ然リ。金魚ナドノ水中ニテ互ニ戲ムル、サマヲ

見ルモ、亦面白シ。水面ニ浮ブカト見レバ忽ニ水底ニ潛リ入リ、逃ル、者アリ、追フ者アルサマナド、犬猫ノ爲ス所ニ異ナラズ。鳥類昆蟲類ナドノ中ニモ、遊戯スル者少カラズ。蟻ノ如キハ、平生ハ極メテ勤勉ナレドモ、遊戯ノ時間ニ至レバ、競走ヲ爲シ、角力ヲ試ミ、或ハ一蟻ノ他蟻ニ負ハレテ行キ、或ハ急ニ身ヲ翻シテ、草ノ影ニ隱レ、或ハ互ニ奮鬪ノ狀ヲ爲シテ、戯ムル、ナド、忙ハシク思想ヲ働カセテ、寸時ノ休息ヲモナスコトナシ。

サレドモ、曾テ遊戯ヲ爲サズ、常ニ謹直ナル顔色ヲナス動物モ亦多シ。蛙ノ戯ムル、ヲ見タル人ハナカルベシ。殊ニ梟ノ如キハ最謹直ナル動物ニシテ、常ニ何事ヲカ考ヘ居ル風體ナリ。曾テ一人アリ。一羽ノ梟ヲ鸚鵡ト誤リテ持チ來リシガ日ヲ經レドモ、一言ノ語ヲモ發セザリシユヱ、傍ノ人、不審ニ思ヒテ、是ハ如何セシニヤ、ト尋ネシニ、其人答ヘテ、鸚鵡ハ思想ヲ凝ラシ居ル最中ナレバ、慣ルヽニ從ヒテ、其思想ヲ述ブルナラント、云ヒケルトゾ。

牝鷄ノ其雛ヲ育テ居ルトキ、傍ヨリ其保育ノサマヲ觀察スルハ、興アルコトナリ。雛ヲ呼ヒテ食ヲ與ヘ、雛ヲ導キテ庭上ヲ行クサマハ、實ニ無限ノ愛情ト、思想トヲ含ミテ、母

ノ子ヲ思フハ、斯クモアルベシト思ハシムルナリ。

カナリヤノ雛ヲ孵化セントスルトキハ、雄鳥ハ汲々トシテ、母鳥ニ巣ヲ離ルヽコトナカラシメント務メ自食ヲ運ビテ之ニ與フ。母鳥若巣ヲ離ルヽトキハ、雄鳥ハ強テ巣ニ歸ラシメ若聽カザレバ、之ト鬪フニ至ル。

或人、曾テ二羽ノ眼白ノ、年々歳々、同一ノ時ニ來リテ、其家ノ後ニ巣ヲ營ミ、雛ヲ育スル

コトヲ知リ、其時期ニ達スレバ、快ク之ヲ待チ受ケタリシニ、眼白モ亦年々其舊巣ニ歸ルコトヲ樂ムサマナリキ。一年雛ノ翼未成ラザルトキ、過チテ巣ヨリ落チシコトアリ。二羽ノ眼白ハ頻ニ鳴キ噪ギテ、人ノ救ヲ求ムルサマナリシカバ、家人等憐ミテ落チタル雛ヲ拾ヒ取リ、之ヲ巣ニ復セシニ、兩親ナル眼白ハ、サモ喜バシゲナル聲ヲ出シテ、家人ノ恩ヲ謝スルサマナリシト云フ。其後程經テ、一羽ノ眼白死セシカバ、翌年ヨリハ、他ノ一羽モ、來ズナリケルトゾ。

第四章　諸動物ノ思考力　(二)

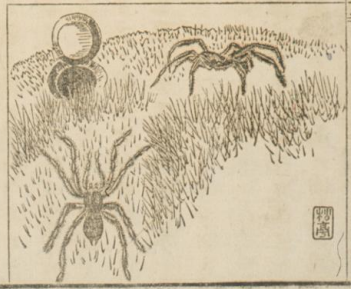
蜘蛛ノ巣ヲ造リテ、蚍蜉ナドノ近ヅクヲ待チ、其距離ヲ測

リテ、躍リ出デ、其網弱クシテ蠅ヲ捕フルニ足ラズト思フトキハ、益絲ヲ吐キ出シテ、其網ヲ強クシ、遂ニ之ヲ搦メ捕ル如キ働キヲ觀ルニ、其腦髓ノ作用ハ、甚多忙ナルベシ。蓋蜘蛛ニハ、腦髓ナシ。然レドモ、小サキ神經ト神經節トハ、他ノ高等動物ノ腦髓ヨリモ、鋭敏ナル作用ヲ爲スガ如シ。

毒性アル蜘蛛ノ一種ニ、巧ニ家ヲ構フル者アリ。即圖ニ示スガ如シ。其次第ヲ見ルニ、先地下ニ穴ヲ穿チ、絹ニ類スル白色ノ絲ヲ吐キテ、其内面ヲ被ヒ、毫モ隙ヲ遺サヾルニ至ルトキハ、木片ヲ集メ來リ、之ヲ井桁ニ組ミ合ハセテ、家トナスコト、毫モ人ノ井側ヲ造ルトキ、木ヲ積ミ重ネテ井桁ヲ造ル狀ニ異ナラズ。又口ヲ以テ土ヲ濕シ、之ヲ井桁ノ上ニ塗ルコト、亦左官ノ壁ヲ塗ルニ異ナラズ。此蜘蛛ハ、其子ヲ背ニ載セテ歩行スト云フ。

蜘蛛ノ奇ナル巣ヲ造ルモノ、更ニ一種アリ。其巣ハ全ク地下ニ在リテ、其上部ノミ地上ニ出デタリ。其表面ノ地上ニ出デタル所ハ、即圖ニ示スガ如クニシテ、地面ノ少シク傾

斜セル所ニ在リ。地中ニ在ル巣ノ中ハ、深サ七八寸ヨリ、往々一尺ニ達シ、直徑殆一寸半モアリ。一直線ニ地中ニ延ビ、其内面ハ絹狀ノ物質ヲ以テ、全ク之ヲ被ヘリ。外面ニモ亦絹狀ノ物質ヲ以テ、巣ノ蓋ヲ造レリ。蓋ト巣ノ内被トハ、是亦絹狀ノ物質ヲ以テ、之ヲ連結スルガユエ、恰蝶番ノ形ヲ爲シ、蓋ノ開閉スルサマ、懷中時計ノ蓋ニ異ナラズ。蓋ノ外面ハ、能ク土ヲ以テ塗リ置クガ故ニ、其蓋ノ閉ヂタ



ルトキ、之ヲ見レバ、周圍ノ土ト見分キ難シ。此巣ハ、地ノ傾斜スル所ニツキ、蓋ヲ上方ニ開キテ、地面ト並行セシメ置キ、蟲ノ蓋ノ上ニ來リシトキ、直ニ蓋ヲ閉ヂテ、蟲ヲ巣中ニ入ル、ナリ。又往々二重ノ巣ヲ造リ、一ノ巣ノ中ニ、更ニ他ノ巣ヲ造リ、其中間ニハ、外面ニ在ルト、同ジヤウナル蓋ヲ設ケ置ク者アリ。カク微々タル動物ノ些少ナル神經ト神經節トニヨリテカ、ル精巧ノ工事ヲナスハ、其天性トハ云ヒナガラ、其間ニ思考ノ力ナクテハ、叶フマジキナリ。

第五章　上世及中世ノ略說

神武天皇諸軍ヲ率ヰテ、中州ノ諸賊ヲ平定セラレ、始メテ大和橿原宮ニ於テ、天皇ノ位ニ即カセ給ヒシハ、即我ガ國

ノ紀元元年ナリ。其後第十代崇神天皇ハ三種ノ神器中ヨリ鏡劍ノ二種ヲ大和笠縫邑ニ移シ祀ラセ給ヒシガ、垂仁天皇更ニ伊勢五十鈴川上ニ移シテ、之ヲ祀ラセラル、今ノ宇治内宮即是ナリ、又其御劍ハ後ニ熱田神社ニ奉祀スル事トナレリ。第十二代景行天皇ハ、雄壯ノ君ニマシマシ、ガ、親軍ヲ率ヰテ、熊襲ヲ征伐シ給ヒ、六年ノ間、日向ニ御駐輦アラセラレキト云フ。其皇子日本武尊モ亦多力ニシテ、豪勇ノ御方ナリシガ、詔ヲ奉ジテ熊襲ノ賊魁川上梟帥ヲ誅シ給ヒ、後又蝦夷ヲ征シテ、之ヲ降服セシメ給ヒシハ、其功實ニ大ナリト謂ヒツベシ。第十四代仲哀天皇ハ、熊襲ノ御親征中ニ崩御マシマシ、カバ、皇后息長足姫親其後事ヲ

攝シ、熊襲ノ滅ビザルハ、新羅ソノ後楯ヲ爲スニ由ルナラントオボシ召シケルニヤ、ミヅカラ男子ノ裝ヲ爲シ、諸軍ヲ勵シテ新羅ヲ親征シ給ヘリ。新羅王其軍威ニ恐レテ、直ニ降服シ、毎年八十艘ノ貢獻ヲナサントゾ誓ヒケル。是ニ於テ、其隣國タル高麗百濟モ亦共ニ降參シケレバ、遂ニ兵刃ニ血ヌラズシテ、此三國ヲ平定セリ。世ニ之ヲ三韓征伐ト云ヒテ、今猶我ガ國人ノ常ニ談柄トスル所ナリ。

仲哀天皇ノ御子應神天皇ノ朝ニ、支那ノ儒學始メテ百濟ヨリ我ガ國ニ傳來セリ。是ヨリ博士學士繼ギテ來朝シ、支那ノ學問漸ク上下ニ廣マリタルハ、猶今ノ洋學ニ於ケルガ如キ有樣ナリシナルベシ。其後十五世ヲ經テ、欽明天皇

ノ朝ニ百濟ヨリ佛像經論ヲ獻ゼシガ、之ヲ禮拜スル可否ニ就テ蘇我物部二氏ノ確執ヲ來タシ、物部ノ一家、是ガ爲ニ滅ボサレテ、拜佛ノ徒、漸ク增加スル勢トハナリヌ。又推古天皇ノ朝小野妹子ヲ遣唐使トシテ支那ニ遣ハサレシガ、其後殆恒例トナリテ、宇多天皇ノ朝ニ至ルマデ歷世之ヲ派遣セラレシハ、彼ノ文物制度ヲ輸入スル媒介トナリシナランカ。

推古天皇ヨリ三朝ヲ經テ、孝德天皇ノ朝ニ至リ、始メテ年號ヲ立テ、大化ト命ジ給ヒヌ。又此時唐制ニ倣ヒテ官省ノ職守ヲ定メ、且田地ノ制、年貢ノ法ナドヲ設ケラレキ。是我ガ國ニ於テ、政事上、未曾有ノ大變革ナリ。其後二朝ヲ經テ、天智天皇ノ御世トナリシガ、天皇深ク中臣鎌足ノ蘇我氏ヲ誅シタル功ヲ思召クマヒ、內大臣トナシテ、大織冠ヲ授ケ、且新ニ藤原ノ姓ヲ賜フ。是藤原姓ノ始祖ナリ。天皇崩御ノ後間モナク、弘文天皇ト大海人皇子トノ間ニ、大戰爭アリテ天皇遂ニ軍中ニ崩シ給ヒ、皇子立チテ位ニ即キ給フ。之ヲ天武天皇ト云フ。有名ナル壬申ノ亂トハ是事ナリ。其後元明天皇、都ヲ奈良ニ遷サセ給ヒテ、七朝七十五年ノ間、コヽニ都シ給ヒ、桓武天皇ノ今ノ京都ニ遷ラセラルヽマデ他ニ遷都シ給ハザリキ。蓋奈良朝マデハ、一世每ニ遷都セラレシガ、是ニ至リ、之ヲ萬世不易ノ帝都ト定メ給ヒヌ。文德天皇ノ朝ニ至リテ、藤原良房始メテ攝政トナリ、光孝天

皇ノ朝ニ、其子基經攝政關白トナリ、是ヨリシテ世々政權ヲ掌握シ、外戚ノ重キニ據リテ、天皇ノ廢立ヲサヘ計ルニ至リシハ、專横モ亦甚シト謂ヒツベシ

斯ク藤原氏ノ專横ナルニ當リテヤ、諸事總ベテ浮華ニ流レ、詩歌管絃ノ宴、郊外遊幸ノ儀式ナド、次第ニ盛ニ成リ行キ、質朴儉素ノ風地ヲ拂ヒテ、優柔惰弱ノ弊漸ク長ゼシカバ、後三條天皇之ヲ憂ヒ、頗改革サセ給フ所アリシガ、未其功ヲ終フルニ至ラズシテ、崩御シ給ヘリ。其後四五世ノ間ハ、源平互ニ起リテ、帝室ノ防衛ト、亂賊ノ討平トヲ以テ、自任ゼシガ、保元平治ニ及ビテ、世ハ漸ク亂麻ノ修羅界トナリ、君臣ノ義、父子ノ親モ、今ヤ又絶エナントスル有樣トハ

ナリニキ。是ニ於テカ、遂ニ鎌倉開府ヲ促シ、モ、是亦治亂ノ推移、天運ノ循環已ヲ得ザル者ナルベシ。

第六章　日本の農業

本邦ハ、古來農ヲ以テ國ノ本トナシテ、之ヲ敬重シ、人民ノ階級ヲ立つるにも、農民ヲ以テ、士ノ次ニ置キ、工商ノ上ニ位セリ。抑農工商ハ皆富ノ生産ニ從事セル必要ノ人民ナレバ、孰ヲ上モ、孰ヲ下トモ、ベキニあらねども、農ハ特ニ艱難ノ勞ニ服シテ地ヲ耕シ、衣服ノ原料ヲ産出セルものなれば、取り分け之を重セざるべからず。況や往時政府の歳入は、專米穀より之を徵シ、工商ハ殆納稅の義務を有せざりしゆゑ、其敬重を受けたるも亦宜なりと云ふべし。現

今農人の數ハ千二三百萬人ゐりて、全國人口の三分一に達し、耕耘する田畑ハ五百萬有餘町にして田租の金額合計三千七八百萬圓ゐり。實に政府歳入金額の半に達せり。されば我が國農事の進否ハ、國運の隆替に關するゐと至大なりと云ふべし。

近來農事の改良を圖る者少からず。或ハ農會を開き、共進會を設け、農學校を起し、農業雜誌を刊行する等、勸誘の道至らざる所なし。蓋從來の農事ハ專米穀蔬菜を收むるに在りて、果樹に培ひ、家禽を養ひ、牛馬羊豚等を畜ふ方法ハ至りてハ、尚改良の餘地ゐる者少からず。されども、近時頻に進步の運に向ひ、地味氣候の觀察より、撰種牧畜の道ハ至るまで、力を勞し思を焦して改良を圖る者多ければ、將來の進步ハ必著しかるべし。

農産物の重要なる者ハ、米、麥、大豆、甘藷、綿、麻、烟草、藍草、生絲、茶、砂糖、雲臺等の類にして、其收穫の額ハ、略左の如し。

一國にして、二百萬石以上の米を産するハ、獨越後のみ。之に次ぐハ、越中、武藏、羽後、信濃

近江、肥前、肥後、羽前にして、各百萬石以上を出せり。九州は米質の佳良なるを以て著名なり。殊に肥後、筑前、豐前等の名最高し。最多く麥を産するハ武藏にして、百五十餘萬石なり。其他ハ肥後、上野、常陸、下總、下野、肥前、陸中、讃岐、尾張、美濃、信濃にして、各四十萬石乃至六十萬石を出す。就中四國、九州、關東の諸國ハ、麥作に著名なり。大豆の産額多きハ、武藏、常陸、肥後、陸前、信濃、越後にして、一國にて二百六十萬石以下、百二十萬石を出す。自餘五萬石乃至十萬石を産するハ、上野、下野、陸奥、陸中、羽前、羽後とす。沖繩、肥前、肥後ハ、最甘藷に饒かにして、各五千六百萬貫以下、四千萬貫を出し、之に次て日向、伊豫、紀伊、安藝、武藏、甲斐、三河の諸國ハ、一千五百萬貫以上を産せり。綿花ハ指を尾張、三河、攝津、河内に屈すべし。其産額各百萬貫乃至百七十二萬貫、次に位するハ、常陸、和泉、伯耆、備中、安藝、備後等の諸國にして、少きも七十二萬貫、多きハ殆百萬貫に達す。山陽道諸國は、概して綿作に著名なり。麻ハ安藝、下野、出雲、岩代、越後の諸國に於て、産出最多く、殊に野州の麻ハ良品とす。北海道も亦良質の麻を産す。烟草は、美作、阿波、常陸、豐後、相模、盤城、備後等に、各二十四萬貫以上、五十六萬貫の産出あり。其外上野、大隅、薩摩、下野、信濃、肥前等之に次ぎ、十萬貫以上を産せり。阿波の藍葉ハ、海内無雙にして、其産出年々二百萬貫以上に達し、尾張も亦百萬貫以上を産出す。其他ハ、武藏、筑後、伊勢に七十

萬貫以下、三河、美濃、安藝の三國に二十八萬貫乃至三十二萬貫を出せり。又十萬貫以上二十六萬貫以下を産をるハ常陸、備後、越後、肥前、信濃、近江、筑前等とす。繭の産出ふ富むハ、信濃を以て最とをと雖、蠶絲に至りてハ、上野に過ぐる者なし。即上野に十七萬餘貫、信濃に十四萬貫以上を産す。其他ハ岩代、武藏、近江、甲斐、磐城の諸國に於て、九萬以下、四五萬貫、羽前、美濃、加賀、越後等三萬貫以下一萬貫を出せり。山城、伊勢、駿河、遠江の茶に於る、其名中外に高し。其量の多寡を以てをれバ、加賀の茶ハ、品質稍劣をとも、五十萬貫の多額に達し、山城、伊勢、遠江、駿河、大和、美濃ハ、各三十萬貫以上、土佐、武藏、筑後ハ、二十六萬より二十九萬、近江、日向、肥後、越後等も亦二十萬以下を産せり。製糖ハ讃岐に最多くして、六百八十一萬餘貫、大隅ハ二百四十五萬貫程、其他五十七萬以下二十一萬貫以上を産をる者を肥後、阿波、和泉、遠江、肥前、駿河等とす。藝薑も亦有益の農産物にして其額亦少からず。年々の油滓のみよても、二十萬貫ふ下らずといふ。

第七章　自然の現象

現象といふ事物の顯れて、人の耳目に入る外相を云ふ。而して外相の顯るゝハ、必勢力内に存して、其作用の外に發をるふ依る者ふせバ、現象によりて、勢力の存をる所を知るべきなり。而して天地間ふ顯るゝ自然の現象にハ、實に種々の驚くべき者ふり。喜ぶべき者あり。日の朝ふ出でゝ夕

に沒し、月の盈虧して其順序を誤らざるハ、通例の事と云へバ、通例なれども、かゝる現象を生ずる勢力ハ、安に在るやと顧みれバ、亦驚くべき者ふあらずや。數千の星ハ、燦爛として天に輝き、其數の窮まる所を知らず。而して各個の星ハ、概自光を發するゆゑ、我ゞの太陽の如くにして、其距離の絶遠ふる、數百年を經過し

て、始めて其光の地上に達するゆゑを思へバ、誰ゝの宇宙の廣大ふるに驚かざらんや。春ハ百草芳を發し、冬ハ氷雪地を蓋ふ。四時の變化を生ずるハ、果して何等の勢力に基くや。昨日ハ青天洗ふゞの如く、風和に日暖に、生類欣喜せしに、今日ハ陰雲四に塞ぐり、人獸皆鬱々たる天氣の變化ハ、何等の勢力ふよりて生ずたる相貌ふるや、更ゝ地上の形象を見れバ、峰巒ハ黛の如く、緑野ハ席の如く、湖水ハ鏡の如く、川流ハ絲の如く、其壯觀風致ハ、如何にして生ぜしや。一滴の水集りて海を成し、散ずて雲を爲し、凝りて雨を爲し、結びて霜雪を爲す。是如何にして然るや。

看來れバ、此の如き驚くべく喜ぶべき現象ハ、多くハ是太

陽の光と熱との勢力の種々の働を爲して、こゝる奇幻の相を現ぜる者ぞ。此自然界に生息して萬物の靈長を以て自任せる人類ハ豈是等の現象を觀察し、其中に作用を爲せ勢力の、一端を理解せずして可ならんや。

第八章　姉妹の心掛（一）

孰の代にか在りけん筑紫の或山の麓ふ、牧牛の翁ありけり。其遠祖ハ山邊の某として、健き武夫にてありけるが年月の遷り行く隨に、今ハ貧しき山民とぞ下りて營業の隙にハ時々市に入り薪を賣りて酒の料に代へたりき。一日市より我が家に歸らんとて、郡領某の館の邊まで來つるに、忽大空かき曇りて、暴雨痛く降りければ暫時雨宿りせバ

やと、路の側なる小高き岡の松蔭に立寄りて、晴間をのみぞ待ちたりける。かゝる所に、雨ハますゝ降りしきり、彼の車の軸を流をとゝふ有樣にて、何時止むべきとも見えざりけるが、頓て百千の雷の集りしかと思ふばかり、最怖しき響して、岡の頂より、大なる塊の崩れ來て翁の頭に落ち掛りければ、何ものも以て堪るべき、叫びもあへず死したりけり。あゝにまた翁の家ハ月彦とて、今年十三四なる童ありけるが、其性賢く、父母に事へて、最まめやかなれバ、鄕人ハ皆其孝心をぞ稱へける。かくて月彦ハ此日は母もろ共に家にありけるが、父の身にかゝる禍難のありとは、夢にも知らざれど、餘りに歸の遲くして、雨さへ痛く降

りけるに、心もとなく思ひて、蓑笠など携へ父の迎ひに出で行きしが、郡領の館の前まで至りけるに、側なる岡の邊に、郷人數多打集ひ、最喧しく立ち騒ぎけるを何事ならんと立寄りて、つくづく見れば、こはいかに、我が父が變り果てたる亡骸にて、目も當てられぬ有様なり。かくと見るより、月彦は、あなとむなしに打

伏して、泣き悲むこそ道理なれ。かくてあるべきにあらざれば、郷人等に扶けられて、父の亡骸を護りつゝ、漸く我が家に歸りけるが、郡領は、豫て月彦の孝心に感で、居たりしを、此回の禍難を聞き、數多の黄金をぞ惠みける。さるほどに、月彦母子は、郷人の厚き辯と、郡領の深き惠とに、力得て、野邊の送も、形の如くに取り營み、七日七日の吊禮も、最懇切に行ひぬ。かくて日數も立ちければ、月彦母子は、郡領の許趣きて、深き惠の喜びを、幾回とかく述べたりしに、郡領は、月彦をつくづく見て、賤夫の子に似もやらず、面貌さへ美しく、其才も凡人ならぬと思ひければ、遂に我が家に留め置きて、我が子と共に、諸の學を授けたりしが、元より賢

き月彦ふれば幾程もなく、婆羅門の書の理さへ辨ふるまでに至りしかば、郡領の喜び斜からず。頓て我が女なる花子を以て妻とせべしと誓ひければ、月彦母子に唯駭くばかりふて、たかをあしく應答をさへにせざりけり。されば、まさに此花子と云へるは容貌こそ麗しけれ。其性拗けて自高ぶる癖ありければ、月彦が家の賤しきを慚ぢ惡みて、我が父のかく誓へることをひたすら怨み居たりしが、もし人の月彦が事を言ひ出づる者あれば、花子は自其耳を掩ひて、妾は假令ひ死ぬとも牧牛の兒の妻といならじと、云ひ放ちけり。さても郡領其は許嫁の婿なる、山邊の月彦を、我が別莊に移り住ませつゝ、豫て良辰を撰び、女花子を嫁

がしめんと萬の設け意を用ゐて最莊嚴に計らひければ、頓て其日になりしかば、花子は豫ひきかづき、打臥して、浴湯をさへふせざりけり。父其は之を見て、痛く駭き怒りしが、強て迫るは惡しかりなんと、故さら言語を和げて、種々諭し勸むれども、諾ふべくも見えざれば、郡領いよ〳〵氣をいらちなほしに、始よりかくとも知りなば、又せんすべも有るべきに、今日とありては、月彦に云ひ說くべき辭もかし。剩へ夜も漸く深け行けば、彼方もさぞや待ちつらんとやせん、かくやと思ひ煩ひ居たりけり。されぞまた花子が妹に、雪子とて、年は纔か十六の春を迎へしのみなれど、其性姉とは反對にて、最溫順なる者なるが、父の意を推

量り、其狀を見かねて花子の側にあざり寄り、二言三言云ひ勸め、又月彦の才に學ぶ秀でたる其有樣など、ほのめかしければ、姉い妹に打向ひ、最腹だゝしき面もちして、子供に均しき御身まで、人並々ふ嗚呼のまゝや、かくまでも、彼の牧童を愛たく思ひ給ひふば、いかで自往き給いぬと、辭をるどく云ひ罵ぎば、雪子いとざと冷笑ひ、貶ふいまど父君の御諭ふきを、いのませんゝ、御諭だまあるならば、月彦ぬゝい、更にも云いぼ、假令ひ乞徒の見ふりとも、いのでかそれを厭ふべき。時勢にゝたゞふ習ひをゝ少ゝい思ひ知り給へ、うらめゝの御擧動やと、涙をはらゝと流しければ、郡領聞きて、さてもけふげなる言りふ、さらば母ふも謀りゝ上、姉の代りに遣いをべゝ御身い實に諾ひて山邊の妻と爲りなんやと問いれて、雪子い紅葉ふす顏に袂を押ひて、父母の御意の隨ふ左まと右にも、計ひ給へと云ひければ、父母痛く喜びて、頓て姉の裝ひまとて、設けふきたる帶、小袖倭の錦、唐の綾、黃金の釵玉の櫛尚くさゞくの物までも取揃へ、最麗ゝく粧ひて、いざとくゝとうふがせば、家の子等も心得て、乘物いそゞせ、ひたゝゝりにはゝりて山邊の家まと至りゝい、夜もはや明る頃ふりけり。

字解 筑紫 元ハ九州全島ノ總名ニシテ後ニハ筑前筑後二州ノ名トナレリ　ひたゝゝり ワキメモフラ

第九章　姉妹の心掛（二）

かくて、月彦は、雪子の姉に代りたる事の本末審にふ聞くに隨ひ、その父の心を酌みて、自ら〳〵、我にとつぎ〳〵やさしさを深くも愛で、ありければ、夫婦の間睦〳〵く、末の松山をも掛けて、最淺からぬ契りなり。のくて、又一年をすぎ過せし、の、月彦は思ふ故よしなればとて、母と妻とを伴ひて、京都の方へ詣で〳〵ゲ頓て、公に召し出され、某の國介とぞなりにけるに、去るほどに、花子は、其後或士人の家に嫁ぎてありけるが、其家元より富たれば、花子はいよ〳〵高ぶりて、妹雪子が人も撰まず嫁ぎしを窃に笑ひ居たりしに、花子ゲ夫と云ひけるは、性愚にして、身の行さへ良からねば、家はいつしか衰へて、朝ふタふの烟さへ、今は竈に立てこのねて空に知られぬ、小夜時雨、繼縷の袖をぞ濡らしける。

かゝる折しも牧牛の兒と侮りし月彦が、高き官に登りしと聞けば、殊更慙ぢらひて、姉と妹の中なぞら、文の通ひも絶ちてけり。このみならず、其夫は、平生亂れし行の、身に報い來て、最惡しき病の床ふ伏しにるが、遂に歸らぬ旅ふ發途して、夢路ならでは見んかとも、かゝるぬ人とぞなりにける。花子は、いよ〳〵身を恨み世を憂き事にや思ひけん、佛の道に入らばやと、あたら黑髮切り捨てつ、身は墨染の袈裟衣、名も妙香と改めて、最奥まりし山陰の草の廬ふ閉ぢ籠り、亡夫の跡、吊ひてぞ居たりにる。さるに、又月彦は、年滿ちて、位をも進められ、他國の守に遷りければ、其國に

赴くとて、途をゝら、故郷に立寄りて、亡父の墓に詣で、舅の家を音づれけるゝ馬乘物の麗しきハ、更ふも云ハず、隨從人數多引き連れて、最莊重にぞ見えふける。かくと聞くより、妙香ハ世を捨てし身も、今更に絶えて久しく逢ハざりし、妹の雪子も懷ゝしく、又一にハ物杯も乞ひて見バや、と思へども、自往くべくもあ

らざれバ、已ゞ弟子ふる尼ゑ、何くれの事云ひ含めて遣をしゝるに雪子も痛く姉の心を憐ゝて、白綾の小袖一襲に、黄金十枚を押し包み、使の尼に持たせて贈りゝるゝ、使の尼も黄金ある事を知らぬ〻て、只此小袖賜をりぬ、とのみ告げゝるをバ、妙香ハにゝ〻くしき顔色にて、もし黄金ゆらバ、米薪の代とも爲をべきを、此山寺の尼ゞ身ゑかゝる小袖を何ゝのせん、とく持往きて返し給へと、再度弟子をぞ遣しける。雪子ハ故由をも知らざりゝるをバ、月彦にも、其本末を語りつゝ、互に彼人の禮ふきを怪みしゝ、又問ひ糺しゝもせで、事をぎにゝり。妙香ハ程經て後、人より此事を聞きて、最悔しき事に思ひけるゝ、又つくゝくと、我ゞ身を顧みて、過

ぎし昔の事おぼゆ。一度父の御諭に背きし罪の深ければ、身に福あきは道理なり。今は唯後の世をあそ願ふべしをとかこち歎くぞ哀れなる。さて又山邊の月彦はそれより後も官位は年毎に彌進み進み行きて遂に雲の上人の末に列なる身となりければ妻の雪子も北の方とて、多くの人にかしづかれ、その上に男兒三人までも設けしかど、最樂しき年月を送りけるとなん。

或人女子の誡にとて

櫻の匂ひ桃のおび、花のもぎたも何かせむ、
柳のしなひ梅の振、松の操をまもれぞし。

字解　國介　國ノ守ヲ助クル職ニテ今ノ縣ノ書記官ノ如シ

第十章　手紙の文

在京の友人に托し奉公口の周旋を依頼せる文

久しくは無音ふ打ゐ過ぎ候ふ動静如何ぞ。我等一同無事にて消方は者に一同安堵の程なれば御休心下されたく存じ候ふ小生儀去秋の通り是迄一向他に踏み出し居る事も之なく又母兄等の許へ帰り少し起居する向の子供を為し住の事なれば是と申もできぬ業を見て渡世を消光致居候ふ一家の生計を立て外きく祝ふも無り為すべくと存ぜ候ふ也。

生ずるは、皆、何様の艱難か、生涯、ひとすぢに、幸福なるべき決心より、何事をも心掛けるものなれば、固陋の経傳よりは、頭中を、学校にて、教へられ、通り、学問の智と、藝とを、第一として、世に、物の、為に、益、なる、事、を、勉むべきは、日本、拾遺、果ては、次第、に、優秀、なる、この、世の中に、出来ること、何、なりとも、勉強、耐を、勉め、智を、磨き、能を、磨きて、肝要と、覚悟、仕、修業、なる、ものの、次第、に、力、なきと、雖、頭、に、貫きて、経験、とは、形、を

右の返事

西文面の、趣、拝承、仕りて、此度、新、結、婚、祭、祖、より、代々、住、み、慣れし、故郷、を、離れ、遠く、赤、羽、に、なりて、成、さ、

遠く、一藝、一能、を、覚え、他日、一家の、基礎、を、立てられ、度、と、の、決心、にて、感服、仕り、候、の、間、地、も、五、三年、来、引続、きて、の、不幸、気、にて、諸、商、賣、一、面、に、淋、敷、お、成、候、て、なる、の、時、み、人、涙、出、なり、ありは、べ、ども、備、へ、の、割、合、少、く、偶、お、備、へ、なる、ものの、りて、も、思、ひ、き、に、よ、り、無、く、極、の、次、第、にて、なる、の、傍、職、業、にて、も、覚、え、られ、て、安、い、諸、よ、締、に、出、て、る、者、迷、な、固、陋、の、傍、に、結、合、中、無、て、ども、為、精、と、勉、を、の、去、よ、も、お、形、み、出、き、お、愈、の、口、見、出、りは、ひ、ご、の、迷、に、初、め、せ、中、上、べ、く、は、召、吏、迷、の、変、お、愛、ら、ば、読、書、等、学、の、に、勉、強、成、し、て、の、れ、は、方、統、る、べ、く、と、為、危、角、尚、為、に、士、農、工、商、とも、学、問、入、用、の、要、柄、に、之、ありは、召、一、定、の、方、向、お、立、ち、て、迷、ふ、なく、業、の、傍、婚、ら

ばな勉強第一なれども未だ学べども未だ親様始めは一回様一統
るべくなれば初めとさまざまなれば先ハ老爺まで

第十一章　兒ヲ愛育スル魚類

越後ノ絲魚川ニ「イトウヲ」ト稱スル小魚棲息セリ。全身鱗ナク、硬キ棘鰭ヲ有ス。即刺魚ノ一種ナリ。此魚ハ巣ヲ造リテ植物ノ枝間ニ懸ク。巣ノ大サ殆人ノ手掌ト相若ケリ。其構造及之ニ用ヰル材料ハ、山雀類ノ營ム巣ニ類セリ。コノ魚ノ最奇トスベキハ、魚兒ヲ育スルハ、雄ノ務ニシテ、雌ノ務ニアラザルコト是ナリ。巣ヲ營ムニハ、雌雄共ニ力ヲ併セ植物ノ細片莖及

刺魚

根ノ纖維等ヲ集メテ原材トナス。既ニ原材ヲ集ムレバ、輕クシテ用ニ堪エザル者ハ之ヲ棄テ其用ニ堪ユル者ハ、類ヲ分チテ排列ス。時トシテハ、己ノ身長ヨリモ大ナル枝葉等ヲ取リ來ルコトアリ。或ハ力ヲ極メテ、現ニ生茂スル植物ヲ拔キ來ルコトアリ。是等ノ原材ヲ堆積シ、中間ニ砂ヲ置キテ層ヲ造レリ。一層成ル毎ニ、體内ヨリ膠ノ如キ液ヲ分泌シテ、其上ヲ塗抹スルガ故ニ、巣ヲシテ頗堅牢ナラシム。巣ノ内部ハ、數室ニ分レ、各室互ニ密接セズ。巣全ク成レバ外見殆一小砂丘ノ如シ。之ヲ發見スルコト、易カラズ。其營構中ハ、己ノ食ヲ求ムルコト甚稀ニシテ、殆他ニ快樂ヲ取ラントスル念ナキガ如シ。蜻蛉（トンボ）・黒魚（ヤモリ）等ノ害ヲ加ヘンガ為

又ハ偶然ニシテ來ルコトアレバ憤怒シテ之ヲ逐ヒ斥ク。母魚卵ヲ放下シ終レバ慈愛ナル其父ハ善ク衆兒ヲ護リ、日トナク夜トナク看護至ラザルコトナク、衆兒ノ既ニ成長シテ、已ノ刺ニヨリテ、敵ヲ防ギ、且身外ノ事情ニ熟スルヲ待チ、始メテ其看護ヲ止ムルナリ。衆兒中遠ク遊ビ去ル者アルトキハ、追ヒテ家ニ引戻シ、若其親ニ從順ナラザレバ、之ヲ巢中ニ幽閉ス。要スルニ、此小魚ノ家族ヲ觀察スルハ頗興味アルモノナリ。

圖ニ示ス所ノ魚ハ、塊魚ト稱スル者ニシテ、日本ニハ産セザレドモ、多ク英國ノ海岸ニ棲息シ、米國ニ於テモ、メイン州ノ海岸ニ於テ之ヲ見ルコトアリ。其形狀一種特別ニシテ、許多ノ斑點アリ。腫起セル肉アリ。又稍規則正シク排列セル肉塊アリ。絶エテ他ノ魚類ヲ害スルコトナク、最無害ノ動物ナリ。此魚ハ他魚ヲモ害セズ、又自護ル具ヲモ有セズ。其形狀ハ、極メテ動作ニ便ナラズ。故ニ舉動不體裁ニシテ、且遲緩ナリ。其恃ムベキ武器ハ、唯其狀ノ極メテ醜陋ナルガ爲ニ、敵ヲシテ一見シテ畏縮セシムル

コトヲ得ルニ在ルノミ。其魚兒ノ母魚ニ從ヒ、母魚ト相戲ムル、狀ハ、雛鷄ノ其母ニ從順ナルト一般ナリ。若見馴レザル者アリテ、其側ニ來ルトキハ、數百ノ魚兒、悉ク母魚ノ側ニ密着ス。此魚ハ、水ヲ泗グコト甚拙ナルガ故、大波浪ニ逢ヘバ、必危險ヲ免レズ。然レドモ、此魚ニハ、粘着力アル鰭アリ、之ヲ以テ岩石木材、海草ノ如キ物體ニ固着スレバ、至強ノ波浪ト雖、之ヲ簸揚スルコト能ハズ。

其體ノ長サハ、幾ド一尺八九寸ニ達シ、體ノ重サハ八九百目ヨリ稀ニ一貫六七百目ニ達スル者アリ。其色ハ黄ナル者アリ、灰色ノモノアリ、黑色ノモノアリ。其産スル魚兒ハ、極メテ多數ナリ。時トシテハバルチック海ニ於テ見ルコトアレドモ、其生活方ノ一種特別ナルガ爲ニ、之ヲ捕ヘ得ルコト甚稀ナリ。其體ヲ他物ニ固着スルトキハ、之ヲ引キ離スコト困難ニテ、僅五六寸ノ長サナル魚ニ於テモ、八九貫目ノ力ヲ加フルニアラザレバ、之ヲ引キ離スコト能ハズ。又此魚ハ、數週日ノ間、一所ニ止マリテ、海草及極メテ微小ナル魚類等ノ食料ト爲スベキ者、已ノ近傍ニ來ルヲ待ツナリ。其卵ヲ看護スルコト、甚誠實ニシテ、往々數百萬ノ卵ヲ守リ、危險ノ敵ヲ視ルトキハ、勇氣ヲ奮ヒテ之ニ當リ、以テ其兒ヲ防グコト、頗剛膽ナリ。雄魚ハ、體ヲ以テ卵ヲ蓋ヒ、魚兒ノ鄒化シ出ヅルマデ、其地ヲ去ルコトナシ。人ノ爲ニ捕ヘラルヽコト甚稀ニシテ、唯英吉利及アイスランドニ

於テハ、間網ニ掛ルコトアリ。海草中ニ於テ之ヲ見ルトキハ、尖リタル鐵器ヲ以テ之ヲ刺スナリ。此魚ノ爲ニ最恐ルベキ敵ハ、海豹ニシテ、好ミテ之ヲ貪ル者ノ如シ。又バレスタインノガリリー海ニ一種ノ魚栖息セリ。其母魚ハ、細草、木葉、海蘚、又ハ介殼ノ細片、小ナル木片等ヲ集メ來リ、之ヲ岩石若クハ老樹等ニ繫着シ、織リテ一圍トナシ、以テ卵形ノ巢ヲ營ミ、魚兒ヲ育スル所トス。又別ニ草ノ莖ヲ纏メテ、網狀ノ蓋ヲ作

ガリリイ海ニ栖メル魚

リ、其巢ヲ被フ。巢ノ間隙ニハ塗ルニ泥ヲ以テシ、間數個ノ門戸ヲ設ク。巢ノ下部ニ、一ノ附着物アリ、是小兒ヲ容ル、搖籃ニ比スベキ者ニシテ、水勢ノ上下ニヨリテ、前後左右ニ搖蕩セリ。巢ノ中央ニ卵ヲ産ミ、草若クハ巢ノ側壁ニ粘着セシム。鄉化スレバ、微小ナル魚兒ハ、巢中ニ充滿シ、父其身體ノ自由ヲ得ンコトヲ務ムル狀アリ。然レドモ其父魚ト母魚トハ、魚兒ノ自一身ヲ處シ、生活方ノ變化ニ應ズルニ足ルマデハ、之ヲ看護シテ怠ルコトナシ。此種ノ魚ノ家族間ニハ、互ニ愛情ヲ存スルコト甚著シク、若危險ナル敵ニ劫カサル、トキハ、魚兒ヲ口中ニ銜ミテ、其害ヲ防グト云ヘリ。蓋此方法ニヨリテ、其兒ヲ防グハ、他ノ鹽水魚類中

ノ大ナル者ニ於テモ、亦之ヲ見ルナリ。

南亞米利加ノ池沼中ニ棲息スル魚類中ニモ、其魚兒ノ水中ニ異變アルコトヲ知覺スルトキハ、忽一團トナリテ、其母ノ口中ニ入ルモノアリト云フ。又南米ノ海岸ニ棲息スル一種ノ魚アリ。膠ノ如キ物質ヲ用ヰテ、其兒ヲ鰭若クハ身體ニ粘着セシメ、以テ外敵ヲ防グ。之ヲ一見スレバ殆瘤ヲ生ジタルガ如シ。

魚類中ニ在リテ、其殊ニ奇ナルモノハ、「龍ノ落シ兒」ト云フ者ナリ。是魚ハ其形極メテ奇ナルノミナラズ、其家居ノ狀ト、生活ノ常習トモ、亦甚奇怪ナリ。關節甚多ク、尾ハ圓狀ヲ為シ、外見ハ動物ニ似ズシテ、寧植物ニ類セリ。其泳グトキハ、身體ヲ直立シ、其尾ヲ以テ不時ノ用ニ備フ。尾ヲ海草等ニ卷キツクルコト極メテ迅速ナリ。周圍ノ水中ヲ四顧シテ、掠奪スベキ餌ヲ求メ、一タヒ之ヲ見ルトキハ、速ニ走リテ之ヲ捕フ。時トシテ二個ノ「龍ノ落シ兒」水中ニ出會シ、其尾ヲ卷キ合ハストキハ、之ヲ引キ離スコト、甚困難ナル狀アリ。此魚ハ、其表皮ノ部分、殊ニ特別ノ發達ヲ為スガ故ニ、殆完全ノ嚢ヲ成セリ。故ニ其中ニ卵ヲ蓄ヘテ之ヲ養育ス。

龍ノ落シ兒

此他尚一層奇異ノ形狀ヲ有スル魚類少シトセズ。其形ト云ヒ色ト云ヒ、動モスレバ、海中ノ浮草ト混ズベキモノ甚多シ。例ヘバ「オキサヨリ」ノ如キハ、己ガ住スル周圍ニ在ル海草ニ類シ、形色トモニ之ヲ辨別シ易カラズ。其色ノ如キハ、灰色又ハ鳶色アリ、而シテ容易ク藍色綠色ニ變ズルコトヲ得ルナリ。

第十二章　少時ノ朋友

人生ニハ、種々ノ快樂アリ。勢ヲ負ヒ氣ヲ使ヒ、得意天下ヲ呑ムニ當リテハ、快ハ則快ナリ。然レドモ權勢一タビ去ラバ、昨日ノ快樂忽今日ノ無聊失意トナルベシ。春風ニ詠ジテ花ヲ賞シ、秋月ニ吟シテ樽ヲ推ス、快ハ則快ナリ。然レドモ四時代謝シテ、寒風膚ヲ裂ク時來ラバ、烏ゾ風流才子ノ懷ヲ傷メザルコトヲ得ンヤ。寔ニ人生ハ苦樂ノ大海ナリ。此大海ノ中ニ立チテ、常ニ人ノ心志ヲ皷舞作興シ、人ノ不幸ヲ慰メ、常ニ愉快ノ泉ヲ湧出スル源トナル者ハ、親友ニ若クハナシ。

親友ト云フ者ハ、互ニ心田ノ底ニ沈メル思想ヲ交換シ、相扶掖提攜シテ、其身ノ進修ヲ圖ル所以ノ者ナリ。表面ニハ吾ノ利益ナルガ如ク見ユレドモ、其實吾ノ利益ニアラザルコトアリ。尋常ノ朋友ハ、皆之ヲ勸メテ、吾ニ諛辭ヲ贈ルベシ。是ノ時ニ當リ、深ク吾ガ爲ニ心ヲ勞シ、顏ヲ犯シテ、吾ヲ制スル者ハ親友ナリ。吾ノ過失アルニ當リ、一モ二モナ

ク、之ヲ攻擊シテ、忠告ノ狀ヲ裝フ者ハ尋常ノ朋友ナリ。是ノ時ニ當リ、深ク吾ガ爲ニ事情ヲ察シ、一タビハ吾ニ左祖シ、一タビハ吾ニ反對シテ、遂ニ吾ガ過失ヲ矯正セントスル者ハ、親友ナリ。吾ノ不運ニ際會シテ、厄難ニ陷ル ニ當リ、世人ハ皆之ヲ棄斥シ、尋常ノ朋友ハ、之ト交ハルコトヲ屑トセザルトキ、能ク吾ガ爲ニ舊時ノ交情ヲ全クシ、貧賤ノ交ヲ爲ス者ハ親友ナリ。人ニ此ノ如キ親友アレバ、不幸ニ陷リテ其志ヲ失ハズ。得意ノ時ニ當リテ、志氣滿盈セズ。能ク終生平準ノ快樂ヲ保續スベシ。

然レドモ、此ノ如キ親友ハ、人々多ク之ヲ有スル者ニアラズ。極メテ友愛ノ情ニ富ミ、交ハル所ノ廣キ者ニテモ、十人ヲ得ルコト易カラズ。少キハ二三人ニ止マルベシ。薄キコト紙ノ如ク輕キコト煙ノ如クナル、今日多數ノ人情ニ至リテハ、曾テ一人ノ親友ヲモ有セザルモノアルベシ。是等ノ輩ハ、多クノ人物ニ交ハルト雖、唯其面ヲ以テ交ハルノミ、未其情ヲ以テ交ハル者ト云フベカラズ。唯其情ヲ以テ交ハルノミ、未其心ヲ以テ交ハル者ト云フベカラズ。是猶商人ニシテ唯顧客ノ姓名ト面トノミヲ識ルニ異ナラズ。世人ハ之ヲ朋友ト呼ベドモ其實眞ノ朋友ニハアラズ、即親友ニハアラザルナリ。

親友ハ强テ之ヲ求メタレバトテ、必ズシモ得ベキ者ニアラズ。又之ヲ求ムルニハ、十分ニ撰擇ヲ爲サザルベカラズ。

一タビ社會ニ立チタル上ニテ求メタル朋友ハ、始ニ多少ノ偽ヲ以テ其交ヲ開ク者ナレバ、相飾ル情ハ容易ニ脱却シ得ズ。故ニ之ニ交ハルコト、一二年以上ニ至ルト雖尚互ニ親友トナルコト能ハズ。其職務ヲ同クシタルガ為ニ生ジタル朋友ハ、稀ニ至密ノ交情ヲ生ズル例ナキニアラズト雖、多クハ其職務ヲ離ルヽトキハ、交情モ亦日ニ疎ニシテ、遂ニ他人トナル者ナリ。酒間若クハ他ノ集會ノ席上ニテ、相會シタル朋友ハ、一時愉快ヲ覺ユルコト多ケレドモ、席散ジテ相別ルヽ後ハ容易ニ之ヲ忘失シテ、幾百回ノ懇親會ヲ重ヌト雖、親友ト云フベキ境界ニ至リ難シ。其間ニ、深ク敬服シタル一二ノ人ヲ得ベク彼モ亦吾ヲ信ズルコトナキニアラザレドモ、既ニ社會ノ務ヲ執ル以上ハ、互ニ屢相訪問スル暇ヲ得ズ、兩個ノ心中ニハ相慕ヒ相思フト雖遂ニ親友タル交ヲ訂スニ至リガタキ者、亦少カラズ。故ニ人ノ一タビ社會ニ立チテ後ハ、親友ヲ得ルコト甚難シ。若其交ル所ノ人ヲ以テ皆吾ガ親友ナリト為シ、野鼻ノ人物ニモ、不信實ノ人物ニモ、虚飾ノ人物ニモ、言行表裏ノ人物ニモ、吾ヲ利用シテ彼ノ為ニセント謀ル人ニモ擇ブ所ナク交ラバ、許多ノ朋友ヲ得難キニアラズ。然レドモ是唯朋友ナルノミ、親友ニハアラザルナリ。若此ノ如キ輩ヲ以テ、吾ガ親友ナリトシ、深ク心腹ヲ布キ赤心ヲ以テ相交レバ、遂ニハ彼等ノ悪德ニ感化セラレ、甚シキハ、ソノ計略ニ

陷リテ、一旦翻然相悟ル日ニ至リ、徒ニ多數朋友ノ無情ヲ怨ミ、世ニ一個ノ親友ヲモ有セザル、孤立ノ人トナルベシ。故ニ親友ヲ得ント欲セバ、豫メ之ヲ其始ニ謀リテ、後來長ク交ハルベキ者ヲ擇バザルベカラズ。一タビ親友ナリト許ス以上ハ、十分ニ彼ガ爲ニ信切ヲ盡シ、亦務メテ彼ノ忠告ヲ容レ、互ニ切偲ノ益ヲ得ベキハ勿論風花雪月ノ清娯モ、之ト共ニスルトキハ、其快樂ハ必無盡藏ナルベシ。

親友ノ得難キコトハ、此ノ如シ。而シテ人ノ之ヲ得ルハ、多クハ少年ノ時ニアルナリ。蓋此時ニ當リテハ、人々ノ心情素樸ニシテ、文飾スル所少ク、爛熳タル天真ハ之ヲ掩ハン

ト欲スルモ掩フコト能ハズ。故ニ其交ル所ノ朋友ニ對シテモ、虛飾甚少キニヨリ、心腹ヲ開キテ相結納スル者ナリ。殊ニ此際ニ在リテハ、其交ル所モ甚狹ク、未「愛博クシテ情專ナラズ」ト云ヘル弊ヲ知ラズ、朋友ノ美ナル所、良ナル所善ナル所賢ナル所深ク之ヲ察知スルコトヲ得ベキナリ。少年ノ時ニ在リテ、交ヲ納レタル朋友ハ、深ク其印象ヲ吾ノ心意ニ留メ、固ク腦底ニ銘記スル者ナレバ、後來互ニ相索居スト雖、容易ニ遺忘スルコトナク、從テ相思ヒ、相慕フ情モ、決シテ壯年以後ニ得タル朋友ノ比ニアラザルナリ。左レバ少年ノ時ニ在リテ、務メテ朋友ヲ擇ビ、終生ノ親友ト爲スニ足ル者ヲ求ムベシ。コノ時ハ、實ニ親友ヲ求ム

ベキ時ナリ。富貴ニ溺スル性質アル者ヲ友トスルコト勿レ。他日彼富貴ナレバ、吾ヲ捨テ、吾富貴ナレバ、却リテ我ヲ嫉ムベケレバナリ。魯鈍ニシテオ力甚吾ニ劣ル者ヲ友トスルコト勿レ。後來永ク同一ノ階級ヲ保チテ、其交際ヲ爲スコト能ハザレバナリ。志氣薄弱ニシテ、勉强ノ精力ニ乏シキ者ヲ友トスルコト勿レ。吾モ亦不勉强トナル恐アレバナリ。輕薄ニシテ信ナキ者ヲ友トスルコト勿レ。到底賴ムニ足ラザレバナリ。親友ニ對シテハ、己ノ學識ニ矜ルコト勿レ。己ノ資力ヲ恃ムコト勿レ。己ノ誇リ得ベキ一切ノ事物ハ皆之ヲ撤去スベシ。然ル後親友始メテ得ベキナリ。

故ニ少年ノ交友ハ、之ヲ壯年以後ノ交遊ニ比スレバ、固ヨリ之ヲ重ゼザルベカラズ。然レドモ、幼年竹馬ノ朋友モ、亦格別ナル者ナリ。壯年以後ニ至リテ、竹馬ノ朋友ヲ追懷スルハ、之ヲ少年ノ朋友ヲ追懷スルニ比スレバ、一層其情ノ切ナル者アリ。同鄕四五人ノ兒童、共ニ狗ヲ養ヒ蝶ヲ逐ヒ、夏日ニハ水ニ入リテ游泳シ、冬日ニハ氷上ヲ奔馳シテ、獨樂ヲ回ハシ、棒ヲ蓄ヘ石ヲ藏シテ、隣邊ノ兒童ト相鬪爭シタルトキノ快樂ハ、壯年以後、尚之ヲ忘ルヽコト能ハザル者ナリ。然ルニ是等ノ兒童、次第ニ壯年ニ達シ、二三ノ子ヲ設クル頃ニ至レバ、其執ル所ノ事業頗懸隔シテ、互ニ情意ヲ異ニシ、終生ノ親友トナシ難キ事情ヲ生ズルコト少カ

ラズ。然ルニ少年以後ニ交ハリタル者ニ至リテハ、互ニ相異ル事業ヲ執ルト雖、其懸隔甚シカラザルニヨリ長ク相交ルベキ者多シ。是ノ故ニ少時ノ朋友ハ、互ニ相敬重シ、且十分ノ撰擇ヲ加ヘテ、終生己ノ裨益ヲ爲スベキ親友ヲ求メンコトヲ務メザルベカラズ。

第十三章　漢學佛教ノ渡來

支那文字ノ我ガ國ニ流傳セシハ、書籍ノ渡來セシ以前ノ事ナルベケレド、ソハ漠然トシテ証明スベカラズ。只儒學ニ至リテハ、其傳來己ニ古史ニ歴然タレバ、復疑フベカラズ。其傳來ヲ如何ニト云フニ應神天皇ノ御世ニ當リ、今ノ朝鮮ノ一部ニ百濟ト云ヘル國アリシガ、其王子阿直岐ト云フ者來朝シテ、皇太子ニ儒學ヲ授ケ參ラセ、更ニ又其國ノ博士王仁ヲ薦メケレバ、王仁來朝シテ、論語十巻、千字文一巻ヲ獻ズ。論語ハ支那ノ聖人、孔夫子ノ言行ヲ載セタル經書ナリ。是ニ於テ、皇太子更ニ王仁ヲ師トシ、諸書ヲ明ラメ給ヒヌ。是ヨリ儒學漸ク朝野ノ間ニ行ハレ、後ニハ朝廷ノ公文ニモ、漢文ヲ用ヰ、又諸國ニ史官ヲ置キテ、四方ノ民情ヲ通ゼシムルナド、漢文ノ用、次第ニ其區域ヲ廣メタリ。又三韓ヨリハ、引續キテ五經博士、醫博士、曆博士ナド來朝セシカバ、我ガ邦人ノ之ヲ學バントスル道路モ、隨テ開通シ、遂ニ我ガ邦固有ノ教ト融化シテ、相悖ラザル姿トナレリ。

其後十餘世ヲ經テ、欽明天皇ノ朝ニ至リ、百濟亦佛像及經典ヲ獻ジ、上表シテ盛ニ其功德ヲ稱讚セリ。蓋佛法ハ印度ノ釋迦ガ立敎セシモノニテ、是ヨリ先已ニ支那ニ傳來シ、支那ヨリ又三韓ニ流傳シケレバ、韓人更ニ之ヲ我ガ國ニ擴メント謀リタルナリ。是ニ於テ天皇之ヲ禮拜スルコトノ可否ヲ廷臣ニ議セシメラレシガ、蘇我物部ノ二氏其議ヲ異ニシ、遂ニ二氏ノ爭端ヲ開ケリ。然ルニ厩戸皇子、亦深ク之ヲ尊崇シ給ヒシカバ、蘇我馬子遂ニ皇子ト謀リテ、物部氏ヲ攻メ滅シ、又因テ謝恩ノ意ヲ表セントテ、攝津難波ニ一寺ヲ建立シ、之ヲ四天王寺ト稱シタリ。其後推古天皇ノ朝ニ至リ、全國ノ寺院四十餘個僧尼ノ數千三百餘人ニ達シケレバ、佛法漸ク上下ニ弘布シ、後ニハ至尊ノ御身ニシテ佛戒ヲ受ケサセラレ、親ラ寶奴ト稱シ給フニ至レリ。亦以テ佛法ノ勢力ヲ得タル一斑ヲ見ルニ足ランカ。

第十四章　雨　自然現象

水ヲ熱シテ二百十二度ニ達スレバ、遂ニ蒸發シテ水蒸氣トナル。然レドモ水ノ蒸發スルハ、必シモ二百十二度ノ熱ヲ須ツニアラズ。其以下ノ溫度ト雖常ニ蒸發シテ已マザル者ナリ。今少許ノ冷水ヲ取リ、之ヲ杯中ニ注ギテ、寒冷ナル室内ニ置クトキハ、其水杯中ヨリ蒸發シ去リテ、復一滴ノ水ヲ止メザルニ至ルベシ。又濕ヘル布帛ノ類ヲ取リ、之ヲ竿ニ懸ケテ、屋外ニ置クトキハ、暫時ニシテ乾燥スベシ。

是水ノ蒸發シ去ルニヨルモノナリ。是ニヨリテ考フレバ、水ハ沸點以下ノ溫度ト雖變シテ氣體トナルコト明白ナリ。

水ハ沸點以下ノ溫度ニ於テ蒸發スルヲ以テ、河海湖沼等ノ水ハ、太陽ノ熱ニヨリ蒸發シテ空中ニ上ル。故ニ空氣中ニハ、常ニ水蒸氣ヲ混ズルナリ。然レドモ空氣ノ水蒸氣ヲ含有スルニハ、自其度アリテ、限ナキ水蒸氣ヲ容ル、者ニアラズ。又空氣ノ溫度ニヨリテ、水蒸氣ヲ含有スル度ヲ異ニスル者ニシテ、熱シタル空氣ハ、分子ノ間疎ナルヲ以テ、水蒸氣ヲ含有スルコト多ク、寒冷ナル空氣ハ、分子ノ間密ナルヲ以テ、水蒸氣ヲ含有スルコト少シ。故ニ夏日炎熱ナルニ當リテハ、地上ノ水ノ蒸發シ去ルコト甚速ナレドモ、冬日沍寒ノ日ニハ、蒸發甚遲シ。

熱シタル空氣ハ、常ニ多量ノ水蒸氣ヲ含有スルヲ以テ、若其空氣俄ニ熱ヲ失ヒテ、寒冷トナルトキハ、前ニ含有シタル水蒸氣ヲ悉其分子ノ間ニ置クコト能ハズシテ、再其一部ヲ空氣ノ外ニ漏サヾルコトヲ得ズ。此場合ニ於テハ、空氣甚シク濕氣ヲ帶ビテ、之ニ觸ル、諸物ヲ濕スベシ。空氣多量ノ水蒸氣ヲ含ミテ、空際ニ上リシ後、俄ニ熱ヲ失フコトアレバ、水蒸氣ハ凝リテ微細ナル水球トナル雲即是ナリ。其水球更ニ相集マルトキハ、雨滴トナリテ地上ニ墜ツ。故ニ雨ハ河海湖沼等ノ水、一旦水蒸氣トナリテ、空中ニ

上り、再凝りて水トナリ、地上ニ落下セシモノナリ

問答　水ノ沸點以下ニ於テ蒸發スル例ヲ語レ　熱シタル空氣ハ寒冷ナル空氣ヨリ、水蒸氣ヲ含ムコト多キ例ヲ語レ。空氣ノ濕氣ヲ帶ブルコト甚シキハ何故ナリヤ。雲ノ生ズル所以ヲ問フ。雨ハ如何ニシテ生ズルカ。

第十五章　智能德器

皇后宮御製

金剛石をみがくごとく
珠のひかりいでざらむ。
人も學びて後にあり

まことに社德いあらはるゝ。

勅語に學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ云々と宣ハせつる如く、古來大智大德の人い概非凡かる勉强と、人に勝れ、忍耐とを以て其智德を成就したる者にして、假令天性人ゟ越えたるオカ有る者にても、勉强して學を修め、忍耐して業を習いざれば、其天稟のオカい、光を發せずして已むゐと多し。

荻生徂徠い近代の鴻儒にして、後の學者激昂奮勵して之に駕せんとしたゞども、遂ゟ及ぶゐと能いざりし大家傑なり。故ゟ徂徠を、亦常々自熊澤の智、伊藤の行に、我の學を加へゐば、一の聖人を出をべしと云ひて自大學者を以て

許せり。徂徠の如き大學者ハ、天賦のオカ人の及び難き所あるに依るとハ云へ、其勉強も亦通例の人の比にあらず。徂徠の著し、譯文筌蹄の題言に、自其幼時學問の困難ふりしさまを述べて曰く、

予十四ニシテ、南總ニ流落シ二十五ニシテ、赦ニ値ヒテ東都ニ還レリ。中間十有三年ナリ。日ニ田父野老ト偶處ス。尚何ゾ師友ノ有無ヲ問ハン。獨先大父ガ篋中ニ藏メシ、大學諺解一本ニ賴レリ實ニ先大父仲山府君ノ手澤ナリ。予此ヲ獲テ研究ニカヲ用フルコトノ久シカリケレバ、遂ニ講說ニ籍ラズシテ、遍ク群書ニ通ズルコトヲ得タリ。

と、此文によれば、徂徠ハ僅ニ其祖父の謄寫せし大學諺解一本を深く研究して、古今未曾有の大學者となりし者と知られたり。徂徠平生書を讀みて暮に至れば出でゝ簷の際につき、簷の際ふても、亦字を辨ド難きに至れば、書齋に歸り、燈下にて書を讀むゆゑ、早旦より深夜に至るまで、手に書冊を釋く時なかりしと云ふ。其勤學ハ、此一事にても、知らるべし。

又熊澤蕃山ハ、岡山藩に仕へ、藩主の信任を得て、要路ふ當り、德を布き、惠を流し、貧しきを救ひ、困めるを賑ハし、賭博を禁じ、淫祠を毀ち、教化を興し、武備を嚴にするなど、其功著しく、或る人の詩にも、

漁家兒女亦知字　笑將孝經教老翁

かど、云ひて、其政績を頌したる程なりしゆゑ、徂徠さら熊澤の智と云ひて、之を崇めたりき。蕃山の才智も、亦天才のみにあらで、其鋭意進修を求むる功大に與りて力ありしなり。試に其始めて中江藤樹の門に入りしときの一話を讀まば、蕃山の才德を成しゝい、偶然にあらざりしを知るべし。

蕃山始めて笈を負ひて、京に上り良師を求めんとせしも、未其人を得ざりしるに同宿せし者の一人語りけるは、過ぐる日、主人より金二百兩を或る方に送り届けよと命ぜられて、遠く旅立せしおとあり。途中馬を僦ひて、打ち騎り、

金をば鞍にかけて行きしぬ、日暮旅宿に投ぜしとき、此金を取り收むることを忘れ、旅の疲に困頓して枕に就けり。夜半に至り、目覺めて、金を遺れたるおとに心付き、おもはと打ち驚き夢にはあらぬかと疑ひしも、夢にはあらず。如何にせんと悶へたれども爲んやうもなければ、此上は腹切て失せ、心の誠をあらはすべきのみと嘆ち居たる折りしも、戸敲く音しければ、出でゝ見るに、向きの馬夫なり。金を出して家に歸り馬を洗ひ、鞍を解くとき之を見出せり。君の遺れたる者なれば、持ち歸りつと云へり。又夢かとばかり打喜び、金を納めて、別に財布より金十六兩を出し、馬夫に與へしに馬夫は君の物を君に返しゝに何條かゝる

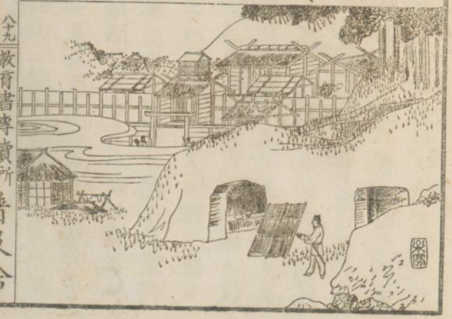
物を受くるおとあるべき。只金二百文を賜ひて夜中おの地まで來りて勞に酬ひ給へど、足りぬと云へり。依りて、汝が發義の心ありてにぞらざれば予が一命を助くるべきやうなし。僅の金にて一命を救ひ恩に酬ゆること、尤の次第ならずやとて再之を與ふれども、取るべき模樣なし。さらば半金をとて、八兩を贈りても亦受けず。次第に減して纔に方金二枚即半兩に至りたれども、馬夫は尚聽こうず、我には我の守るべき節ぞれば、願くは我の節を汚し給ふおと勿れと云へり。益其言に感じ、今の世寡欲の者誠に少し義を以て利と爲るおと馬夫の如き者絶えて得べからぬ。必子細ぞるべしとて、之を問ひ質せしに、馬夫遂に答へて賤役を以て口を糊するもの利を思はざるおは有らず。然れども弊邑には中江與右衛門と云へる先生あり、其言を聽くに誠正を以て身を修め君に事ふるには忠を以て、親に事へては孝を盡し、貧ありとて濫るるおと勿れ賤しき身分として枉ぐれることを爲るべからずと教へ給へり。若金を受けるば、此心を欺くべしと云へり。云々と物語るを蕃山聽きて、馬夫は鄙しき身分の者なり。道を識れる者にあらざれ利に趨くおと走るるが如くなるべき筈なるに、其廉潔なるおと、古の君子にも愧ぢざるは教育の効に外ならず。中江氏の德こそ想ひやらるれ、此人に從ひ業を受けぎして、誰れか師とし事ふべきとて遂に中江氏につ

きて門に入らんおとを請ひ〜に藤樹ハ人の師とふるふ足る學德を〜とて蕃山の入門を謝絶せり。蕃山益請ひて已まず二夜其廡の下に卧せり。藤樹の母蕃山の意を憐み、藤樹に向ひ遠方より來れる人ふく懇請をるふ、之に習ひ〜所を傳ふるも好で人の師とふるとて、人の謗るおとハをかるべ〜とて蕃山の入門を許さんおとを勸め〜かバ藤樹始めて蕃山の請を容れたりと云ふ。

第十六章　上古ノ風俗

上古家屋ノ建テヤウニ、三種ノ別アリ。其一ハ「ミアラカ」若クハ宮ト稱ヘタル天皇皇族ノ宮殿ナリ。其二ハ、庶民ノ家ニシテ、其三ハ、山間僻邑ノ民ノ住居シタル石屋土屋ナリ

其「ミアラカ」ヲ建ツルニハ、地下ノ盤石ニ大ナル一本ノ柱ヲ建テ、其周リニ小キ柱ヲ幾本トモナク立テ、之ニ棟梁桁棰ヲ加フルナリ。此棟梁ト柱トヲ結ビ合スニハ藤葛ナドヲ用ヰ、屋根ハ、山茅ニテ葺クヲ常トス。又其屋根ノ上ニハ、長キ丸太數個ヲ並ベテ、風ノ害ニ遇ハンコトヲ防グ、之ヲ「カツヲギ」ト云ヘリ。又庶民ノ



家ハ矮キ汚穢ナル建物ニテ、四方ニ壁ヲモ環ラサズ只筵ナドヲ張リテ、雨露ヲ凌グノミ。又石屋土屋ト云フハ穴居ノ一變シタル者ナランガ。其矮陋ナルコトハ、遥ニ庶民ノ家ニ劣レリト云フ。而シテ前ニ擧ゲタル家屋ニ就キ、其室内ヲ如何ニト云フニ、貴人ノ室ニハ、絁、麻布ナドノ帷ヲ垂レ、床ニハ、獸皮菅筵ナドヲ敷キタレド、庶民ノ家ニハ、床ノ設ナク、只地上ニ藁又ハ木ノ葉ナドヲ敷キ誥メタルノミ。其後ニ至リ、追々建築ノ法モ進ミ來リ、高臺ノ設モアリ、又板屋ヲサヘ、建ツル有様トハナリヌ。之ヲ板蓋宮ト稱ヘタリキ。食物ハ、五穀野菜ヲ用ヰシガ、其中ニモ、山ニ住ム者ハ、鳥獸ヲ獵リ、果實ヲ拾ヒナドシテ食ニ充テ、海邊ニ住ム者ハ、魚ヲ漁リ、海藻ナドヲ採リテ、穀物ノ不足ヲ補ヒシコト、猶今ノ漁民ニ異ナラズ。常食ハ、朝晩二回ニシテ、何レモ黒米ヲ食ヒタリ。又穀物果實ナドヨリ、酒及醴酒ヲ釀造シテ飲ミタルハ、極メテ古キ習慣ナルガ如シ。飲食ヲ盛ルニハ、土器又ハ木ノ葉ナドヲ用ヰシガ、只神祇ヲ祭リ、貴人ヲ享スルトキノミハ、酒饌ヲ卓上ニ供ヘタリト云フ。

衣服ハ、上ニ狹キ袖ノ短衣ヲ着ケ、下ニ褌トテ「ヅボン」ヤウノモノヲ穿テリ。貴キ婦人ハ、裳ト褌トヲ着ケ、頭ニハ帽衣ヲ冠レリ。袵ハ左ヲ上ニシ、紐モテ之ヲ結ビ合スナリ。此等ノ衣服ニハ、絹布麻布ナドヲ用ヰシエ、上古已ニ織物ノ法早ク開ケタルコトヲ知ルベシ。

男子ハ前額ノ處ヨリ髮ヲ二ツニ分ケテ、兩髻ト爲シ、ソレヲ耳邊ニ束ネテ、角子トナスナリ、之ヲ「ミヅラ」ト云フ。女子ハ髮ヲ後ニ垂ル、ヲ常トスレドモ、賤ノ女ハ、ソレヲ結ビ上ゲタルモアリキ。男女トモニ櫛ヲ挿シ、草木ノ花ナドヲ簪ニセリ。又手足ニハ、寶石金銀ナド、鐶ヲ箝メ、或ハ曲玉管玉ヲ緒ニ繫ギタルヲ首ノ處ヨリ胸部ニ垂レテ、飾トナスアリ。且男子ノ外ニ出ヅルトキハ、劍ヲ帶ビ、杖ヲ持チ、弓矢ヲ携フルコト、一般ノ風習ナリ。

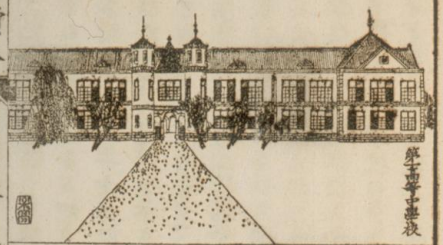
上古ハ、人死スレバ、新ニ一室ヲ造リテ、死者ヲ置キ、之ヲ喪屋ト云フ。親類朋友ナド、之ニ會シテ、樂ヲ奏シ、饌ヲ薦メ、花ヲ供ヘナドシテ、之ヲ祭リ、五七日ヲ經テ、始メテ埋葬スルナリ。貴人ハ、石窟ノ中ニ石棺ヲ安ンジ、金銀寶石刀劍ヲモ併セ納メ、又近侍ノ者ヲモ、生埋メニシタリシガ、垂仁天皇之ヲ禁ジテ、代フルニ偶人ヲ以テシ給ヘリ。埴輪ト云ヘル者、即是ナリ。其陵墓ニハ常磐樹ヲ植エテ標トナシ、ガ、後ニハ、石表ヲ建ツル事トナリヌ。

第十七章　日本の教育

我ゞの國ゴて學校を設けて子弟を教育せ〜ハ、其由來甚古く、今を距ること一千有餘年前、天智天皇の御世に在りて、既に是事ゴり〜ゴり。爾來、紀傳、明經、明法、算道、の四科を始ゴて、醫易曆書畫等の學漸く備はり、一時其盛を極めしゞの、戰國割據の時に及びて、士人ハ、專武藝を講ゞ、

文學ハ遂に僧侶の手に歸するに至れり。德川氏の時ニ至り幕府大ニ文學を奬勵し、各地の諸侯も、亦相競ひて藩學を起し、和漢の學を講じ、從ひて碩學大家、踵を接して、世ニ出で、武術も亦盛に行はるゝあり、藩士の間にハ文武の教育並び行はれ、彬々として極盛を鳴らせり。然れどゝ、當時の教育ハ武士の專有にして、農工商の如きハ之ニ與るあとを得ざりしなり。

維新の後、泰西の制度に倣ひ、全國に教育を普及し、邑ニ學むさる民なく、戸に教へざる徒なからしめんとて、明治五年始めて學制を布き、各町村に小學を起し、士農工商の別なく兒童をして總て就學せしめ、又中學、大學、專門學校等



を設けて、人材の教育を務めたるハ實に古來未曾有の盛事なり。啻に教育の普及せしのみならず、教育の方法も、亦長足の進歩を爲し、昔日の迂濶なる教育法を廢し、近代學問の進歩によりて得たる善良の教育法を採用し、今日に至りて、諸般の學問藝術駸々として進歩の勢あり。全國の

小學校に於て體操を課して體育の進歩を謀り、理科を教へて、知育の進歩を謀るが如き皆前代にかかり一所なれども、殊ふ明治二十三年十月に、教育上ふ關をる勅語を下させ給ひて、德育の標準を示されたるが如きハ、實に曠古の偉業と云をざるべからず。

小學校ハ尋常高等の二科に分ち、各地の情況によりて、各村又ハ數村に、一個若くハ二個以上を設置をるものとす。而して其公立ふ係るものと、私立に成るものとの別あり。公立の學校多くして、私立ハ大抵其三十三分一に過ぎず。一府縣下にして、小學校の多きハ、一千に餘り、少きも二三百を有せり。又全國を通じて學齡兒童の數ハ、七百二十二萬餘にして學齡兒童百人に付き就學五十人餘の割合なり。

尋常中學校ハ、一府縣下に大抵一個ゐり。又公立私立の別あれども、全國中私立ハ、僅に十校に過ぎず。

高等中學校ハ全國ふ七校あり。東京第一仙臺第二京都第三金澤第四熊本第五山口（山口高等中學校）鹿兒島（造士館）とす。尋常中學の科程を卒りて、更に高等の教育を受けんとしてハ進みて大學に昇らんとをる者の入る所にして、高等教育を望む者ハ、大抵此門よりをるなり。

帝國大學ハ、東京に在り、六個の分科大學より成る。法科、醫科、工科、文科、理科、農科即是ふり。各科を終りて、尚更に深奥

の研究をなさんとする者の爲に、大學院の設あり。此外各分科大學に、撰科の設けあり。即高等中學を經ぞ〻て、大學に入らんとする者の爲に置く者あり。

官立專門學校の重ふるものハ、高等商業學校、東京工業學校、東京音樂學校、東京美術學校、陸軍大學校、士官學校、陸軍幼年學校、海軍大學校、海軍兵學校、在江田島、東京商船學校、東京郵便電信學校、札幌農學校、在北海道等にて、大抵東京に在り。此他特別の種類に屬する者あり。高等師範學校、高等女子師範學校、東京盲啞學校、聾習院、華族女學校の如き是なり。

公私立專門學校凡五十九個を學科に依りて區別すれバ、法學七、醫學六、農學六、商學十、獸醫學三、工學二、航海學一、數學十三、畫學二となす。其中學生の著〻く多數ふるハ、法學六千六百餘、醫學千七百餘、商學千四百餘、及數學九百餘となる。又此等の專門學校所在地を見るに、最多きハ、東京にして、其他の地方ハ大抵二三校に過ぎず。

高等女學校ハ、全國を通じて、二十九校あり。中八校ハ公立に係れり。而して東京に在るもの十七個、自餘ハ京都、大坂、新潟、栃木、三重、山口、滋賀、高知、福井、和歌山、鳥取、廣島の十二府縣に散在せり。

尋常師範學校ハ、總て四十七校にして、各府縣に一個を置く制規あり。生徒の總數ハ、五千に餘る。

各種學校とハ、前に掲げたる諸種の學校中に算入もべからざる、公私立諸學校を總稱もる者にして、其數多く、其種類も亦甚雜駁なり。其中生徒の最多き學科ハ、和漢學を修むる者三萬六百英學一萬二千數學六千四百手藝五千五百法學千四百簿記六千九百商學三百餘の如き者ありと云へり。（明治廿四年ノ調査ニ依ル）

第十八章　公益世務

學を修めて智能を啓き業を習ひて德器を成就したる者ハ、更に進みて、世の爲、人の爲になる事を爲さゞるべからゞ。世の爲、人の爲になるべき事の中にて、大ハ道を講ず理を究め學校を興し、病院を設け、土地を開き橋梁を架し、鐵道を布き汽船を造る如き事ゆ。小ハ、日常必須の器具よつきて、發明工夫を凝を如き事あり。苟世を思ふ誠の心あらば、平生坐卧の間にも、亦公益を廣め、世務を開く機會ゆるべし。今左ゆ僧禪海の話を擧げて、其手近き一例を示もべし。

享保の頃、田國の僧に禪海と云ふ者ありき。諸國を廻りて豐前の國に至りける時、巖石を切り拔きて、隧道を穿ち往來を自在ゆして、永く人畜の害を除けるゆとゆり。其顛末を如何と尋ぬもべ、豐前の國に、山國川とて、大ふる流あり。有名ふる耶馬溪より來り、中津の城を繞りて、海に注ぎ入る川なり。此川に沿ひて、一條の道路ゆり。豐後の南部に往

來る所にして岩石高く出で岩根浪荒く霖雨あどの時に、人馬の往來いと難く水ふ溺るゝもの多ありけるを、土地の人之を腐れ路と呼び做せり。禪海此地ふ來り誓ひて此岩を切り開き後來溺死の難を救ものと志しけるが、其頃よりて非常の大事業なれば笑ふ者のみふて賛くる者とてハ一人もなかりけり。されども禪海い少しも氣を屈せず、經營止むことなかりしかば、人々次第に感化して、吏民の力を合せるもの、追々出で來り終に三十餘年を經て、彼の岩を穿ち開くこと三個所、其長さ總べて百間、竪横ハ二丈許、洞中幽冥にして日光の通ぜざる處にハ窓を穿ちて明りを引き人馬打ち並びても通行をることを得べき平坦の道路となりけるとぞ。

第十九章　氷　自然現象

冷水ヲ取リテ之ヲ熱スルトキハ、溫度ノ増スニ從ヒ、次第ニ膨脹シテ、一旦沸點ニ達スレバ、水ハ液體ノ狀ヲ變ジテ、氣體トナル、之ヲ水蒸氣ト云フ。

之ニ反シテ、一旦沸點ニ達シタル水ヲ冷ヤストキハ、溫度ノ減ズルニ從ヒ、次第ニ其容ヲ減ズレドモ、溫度既ニ下リテ、華氏三十九度ニ達スレバ、復收縮スルコトナクシテ、却テ膨脹ス。故ニ水ノ稠度ハ、華氏三十九度ヲ以テ最濃密ナリトス。水ノ溫度之ヨリ下ルトキハ、其冷エタル部分輕疎トナリテ、表面ニ浮ビ出デ、溫度減ジテ華氏三十二度ニ至

レバ水ハ遂ニ液體ノ狀ヲ變ジテ固體トナル、之ヲ氷ト云フ。故ニ氷ハ水ノ甚シク熱ヲ失ヒタルニヨリテ生ジタル者ニシテ、其空隙ヲ塡塞シ、重量ヲ有シ、運動ヲ他物ニ傳フル性アルコト等、毫モ水ニ異ナラズ。唯其相異ナル所ハ、氷ハ一定ノ形ヲ有スルニ在ルノミ。

水ノ稠度ハ三十九度ニアリテ、最濃密ヲ極メ、其以下ノ溫度ニ下ルトキハ、却テ膨脹スルガ故ニ、氷ハ水ニ比スレバ、質疎ニシテ比重モ從ヒテ小ナリ。是ヲ以テ水ノ變ジテ氷トナルニ當リテハ、其容必膨脹ス。而シテ其際ニ發スル力ハ、甚強キ者ナリ。之ヲ證セント欲セバ、鐵器ニ水ヲ滿テ、固ク蓋ヲ封塞シテ、之ヲ氷點以下ノ冷室ニ置クベシ。然ルトキハ、其中ノ水變ジテ氷トナル際ニ、非常ノ强力ヲ發シテ、鐵器ヲ破裂スルコトアリ。又亟寒ノ候ニ際シテ、往々水管ノ破裂スルコトアルガ如キモ、多クハ此理ニ由ルナリ。

寒夜凛冽タルニ當リ、戶外ニ結ベル氷塊ハ、其溫度甚低クシテ、或ハ三十度、或ハ二十度、或ハ又之ヨリ下ルモノナリ。今其氷塊ヲ暖室ニ移ストキハ、次第ニ室內ノ熱ヲ吸收シ、其溫度上リテ三十二度ニ達スレバ、遂ニ融解ス。然レドモ、氷塊ハ三十二度ノ溫度ニ接スルモ、必シモ融解スル者ニアラズ。一旦三十二度ノ溫度ニ達セシ後、尚多量ノ熱ヲ吸收シ、而ル後、始メテ三十二度ノ冷水トナリテ融解スルナリ。故ニ氷ト水トハ、共ニ三十二度ノ溫度ヲ示スト雖、其含

有スル熱量ハ互ニ異ニシテ、水ノ有スル熱量ハ同度ノ氷ノ熱量ヨリ多シトス。

之ト同ジク、水ヲ熱シテ二百十二度ニ至ラシムレバ、沸騰シテ水蒸氣トナレドモ、二百十二度ノ水蒸氣ト、之ト同度ナル沸騰セル水トハ、互ニ其含蓄スル熱量ヲ異ニスル者ニシテ、水蒸氣ハ、同度ノ水ヨリ、多量ノ熱ヲ有スルナリ。

以上説ク所ニヨリテ、水固結スレバ氷トナリ、蒸發スレバ水蒸氣トナリ、而シテ融解スレバ水トナルコトヲ知ルベシ。此三物ハ其形狀甚シク異ナリト雖、畢竟一ノ天然物ガ、三樣ニ變化シタルニ過ギザルノミ。

第二十章　手紙の文

都會の問屋に貨物の不良を訴ふる文

貴店とは五年引續き以来貴店よりて八絶すで正直に驚めき居よりも図極の品仕向に誤りあると良好の貨物のみ注進へ下さる故て製品の粗さも多くこれありは愛図る雖く以後のとい新て変りは品仕向必何卒もふ仕合の品よは製品よて八見送結構なも延滯致候ゑ決して其れなく正直二御示致候へ共貴店より織物商標の品名抜を申付は若八お出なくと存ぜ先ず角分にのみとて迷惑致候換れ者くて八営業之外きゆきゆき成ると迷惑後八貴店との五引を止めなかるとなくは就ては品名換下さまて乞又八五引

を出免たれ二つの手折匹〜に郷養下されたくは先ハ
元急き要件のみを賜倉中そ〜ぎ〜

注意　手代ノ不注意ニテ貨物ヲ誤リタル旨ノ答書ヲ作ルベシ。

第二十一章　立花侯の差添刀

筐底雜誌

明治七年の冬、厩橋なる梅若の能見にまかでーに、吉井故從三位公のおはーて、能くおそ來つれば、おーぶたきのほーきふとぶ席にこよ、とゐるふそれが御あとべふ、侍りーぶ、折ふー、立花老侯もおそーて御ものぶたりどもありき。さてなかばにーて、公の宜ふいでをそおふめづらーきもの見せんと、立花侯に願ひつゝでぐーとあるに、老侯はかせ

給へる、御さーそへを示さる。謹みて其御てーらへを見るふ、柄も鞘も、ゐつき純金ゝて巻たるぶ量りの重さ、金色のふるび其結構いふぎかりふー。苦ーからぶ、中子を見よ、とあるに畏みをぶら御鞘を拂ふふ地はざのーまり、やきにほひの妙評ー奉るべうもゐらぶ。光彩まふこを掠め凝氷手に瀝らんとする思ひありたゞ御鞘に痛く物のゐたりた る痕ありて覺えぶ目とまりぬるを公笑いせられ、かぞこのりの名刀、此おんもとふい數多ゐるべけれど、たゞ此疵のみぞ又おきおんたからなる。わがそふに見せたき、と云ふもおを故ふこそ、宜へゞ老侯へほゝ笑み給ひつ此きずの事のもとをぞりつみてとき明ー給へり普侯家第二世、

忠茂のきみ此刀を愛しづねにはかせ給いんとて、研を命じてこしらへを工夫有て奢れるこしもなからねども、しづく作りのへん費あらせじとさてあそかく純金の板おねもて巻せられしを、一世宗茂のきみ大に不興し給ひて忠茂をのたへみ召されいましめて宣ふい抑我家いもと微賤なりしを世々武運をみおき弱きをたをけ強きをくじき、義理を泰山の重きみ較らべ身命を鴻毛の輕きにおぼらへ、弓矢とりて私無このりしをもて幸に武運めでたくいつも目ふ餘る大敵をきりおびけ終にい世ふ數まへらるゝ身とゑおりき。さればわゐ若き頃い太刀刀おどいたゞ適用を旨とし鞘わるれば麻ふてもおらげ柄い布にてゑ巻きしぞかしおおとへ幸によき時ふ生れあひてかく榮華にほこるふ付ても祖先の勤苦を思ひことさらに身を慎みて、もちら節儉を守らるゝやう有まほしくれぞいて治れるに亂れを忘をず安きふ危きを忘れざるおそ良將の心といきけさるを今天下やゝ事無ければとてはや、斯る太刀かたなの好みをおし無益の飾りにあまたの金銀を費やさるゝつたなさよこのゝる不覺おる心をもて萬人の上に立たば下々い皆これに倣ひて無用の衣服みやるふまで飾りをきはめ聲色の欲を恣にして天下有用の財をつのひをてすい大事よと云ふ時い馬物の具の用意をも調へかねて世のもの笑ひとなり先祖の名をゑ汙さ

れんおとまの所たり見る心地ぞする。此と心得られ候へ、と有るに、忠茂ハ初より、只ひれふ〳〵て、聞居られ〳〵が、つと身を起し、庭に下りたち有あふとび石に此鞘を打つけられトを、宗茂立て、おれをとゞめおことハ我諫めをはら立て、かくハをるか、と仰をるゑ努々左ふハ候ハず、只身のあやまりの悔〳〵さふ、此鞘をおぼちをて候ハんと存ぜるよでに候と答へ給へば、をハまた費えに費えを重ぬるあり。只其儘におきて、構へて我申し、事心にお忘れ給ひそ、と有るに忠茂ハ生涯此刀を差添にして、庭の訓をふみたがへぬ道のしをりとハぜられ〳〵とぞ。

第二十二章　霜及結晶　自然現象

嚴冬迫寒ノ候、天氣晴朗ナルトキ早晨起キテ四邊ヲ眺望スレバ、屋背或ハ街頭ノ樹木ハ皚々タル白粉之ヲ覆ヒテ、頗壯麗ノ觀ヲ呈スルコトアリ。是晝間ニ日熱ヲ受ケ、十分燦マリタル空氣、多量ノ水蒸氣ヲ含ミタルモノ、日沒後ニ至リ、熱ヲ失ヒテ冷却シ、水蒸氣ノ幾分ヲ維持スルコト能ハズ、餘分ノ水蒸氣ハ、凝リテ屋背、樹木ノ如キ、寒冷ナル物體上ニ止リ、更ニ結ビテ氷トナリシ者ナリ、之ヲ霜ト云フ。此ノ如キ氣候ニ際シテハ、特ニ戸外ノ物體ノミ白粉ヲ以テ之ヲ覆ヘルニアラズ、室中ニ於テ、玻璃板ニ呼氣ヲ吹クトキハ、玻璃面曇リテ糢糊タル中ニ、美麗ナル模樣ノ現出スルコトアリ。是口中ヨリ吐出シタル水蒸氣、寒冷ノ空氣

ニ逢ヒ、凝リテ液體トナリ、次ニ變ジテ固體トナリシモノナリ。今樹葉ニ置キタル霜又ハ模糊トシテ玻璃面ニ凝結シタル物質少許ヲ拭ヒ來リ、之ヲ顯微鏡下ニ照ストキハ、幾多ノ氷片皆一定ノ形ヲ有シ、條理アル方式ヲ以テ整列シ燦然トシテ花ノ如キヲ見ル。其狀恰一定ノ角度ニヨリテ玻璃板ヲ切リ、一定ノ方式ニヨリテ、之ヲ整列シタルガ如シ。此ノ如ク一定ノ形ヲ有スル、數多ノ細片ヨリ成レル固體ヲ結晶體ト名ク。氷ハ皆水ノ結晶セシ者ナレドモ厚キ氷ニ於テハ結晶ノ細片數多相重リテ一團トナリ、人其各片ヲ明視スルコト能ハザルナリ。

問答　霜ハ如何ニシテ生ゼシ者ナリヤ。冬日玻璃板ニ向ヒテ呼息スレバ、其面ニ美麗ナル模樣ヲ生ズルコトアリ其理如何。結晶トハ如何ナルコトヲ云フヤ。水ハ結晶體ナリヤ否。

高等小學新讀本上篇第四卷終

明治廿七年三月廿二日
文部省檢定濟

小學新訓本 篇第四卷 終

明治二十五年十二月廿七日 印刷
同 年十二月廿八日 出版
同 二十七年三月九日 訂正再版印刷
同 年三月十二日 發行

改定價金拾九錢

東京小石川區久堅町七十四番地
編述者 西村正三郎

東京神田區柳原河岸十四號地
發行兼印刷者 辻太

東京神田區柳原河岸十四號地
印刷兼發行所 普及舍

版權所有